

石川葵衣、石原淳子（疫学・公衆衛生学）、小手森綾香（食の情報・栄養疫学）、中館美佐子（公衆栄養学）、久世明香（行動発達）、永澤美保（同調的共生）、菊水健史（社会内分泌）、茂木一孝（社会神経学）

研究の背景と目的

ペットを飼う人はウェルビーイングスコアが高く、病気にかかりにくいことがいわれており、海外の疫学研究において報告がされている。しかし、日本ではペット飼育の歴史も浅く、エビデンスは多くない。

本研究の目的は、ペット飼育と病気の発症の関連を明らかにすることを目的とし、特にペットへの愛着度の高さに注目し、人の健康に影響を与えるのかどうかを調べる。

研究・調査方法

国立がん研究センターで行われている生活習慣病の発病因子の調査を目的とした次世代多目的コホート研究（JPHC NEXT）の生活習慣に関するアンケート〈10年後調査〉で以前聞かれていた質問項目にはペットの有無と種類しかなかった。そこで、ペットを飼っていると回答をした人に追加調査を行う。

- ・ペットと人の健康についての先行研究を調べる
- ・愛着度はどのようにしたら測ることができるのかを調べる



アンケートの項目を自分たちで改めて作成し、追加のデータを収集してそのアンケートの回答から得られた情報を解析し、運動習慣などとの関連を横断的に調べる。

結果と考察

現在の質問候補

1. 在宅時間
2. 散歩にかかる時間（季節によって違いがある可能性がある）
3. 屋内外どちらで飼っているか、どのくらい触れ合っているか、同じベッドで寝ているか
4. 飼育年数
5. ペットの数、犬種
6. 主に誰が世話をしているか
7. どれくらいの頻度でお風呂に入れているか

ペットへの愛着度を測る指標として**レキシントン愛着度テスト**というものが使用されている。

- ・23個の質問で構成されている
- ・英語で開発された
- ・英語版は4段階（強く同意する、同意する、同意しない、強く同意しない）で評価
- ・日本語版は5段階（大変そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、全くそう思わない、わからない・または回答拒否）で評価
- ・合計したスコアから愛着度を測る

これから

質問例を回答しやすく改良し、先行研究をもとに選択肢の改良をする。

質問票が完成したらパイロットスタディを行う。